コンドルの洋館

杉山　晃
学校法人清泉女子大学理事長

明治時代を代表する建物のひとつに鹿鳴館がある。「鹿鳴館外交」とか「鹿鳴館時代」というふうにも使われ、一時代を画した建物である。日本史の教科書にも登場するので、いまは存在しないこの建物に出入りしていた社交界の婦人たちの独特なファッションを思い浮かべる人もいるにちがいない。だがジョサイア・コンドルとなると、おそらくいまひとつ反応がにぶいだろう。私にとっても清泉女子大学につとめるまでは、まったく関心外の人物であった。

ジョサイア・コンドルは、明治政府に工部大学校の教授として招かれ、鹿鳴館を設計したイギリスの建築家である。のちに岩崎久彌茅町本邸や諸戸清六邸などを設計した。本学で「本館」と呼んでいる洋館(旧島津家本邸)もコンドルが手がけた晩年の代表作である。2019年に国の重要文化財に指定された。

実はこの原稿をいまその一室で書いている。白い漆喰の天井は高く、木製の扉は見上げるほどの背丈がある。窓からは庭園の緑と、紅葉した大きな楓の木が見える。理事長室は正面玄関のすぐ脇にあり、100年ほど前は来客たちの控えの間だった。扉を開けると、赤絨毯がフロア一面に広がり、木製の大階段が見える。さらに奥に学長室があるが、島津公爵一家の家族用食堂だったところだ。赤絨毯を踏みながら2階に上がると、大小の会議室や教室が並んでいる。そうした教室のひとつを私もゼミの授業に十数年使ったが、天井の装飾が見事で大理石の暖炉がある部屋は、かつては公爵夫人の居室だった。入試課も建物の中にあり、職員たちは夜遅くまで仕事をしている。この洋館はキャンパスの中でいちばん遅くまで明かりを灯している建物でもある。教授会も種々の委員会もここで開かれ、本学の重要な決定はすべてここでなされる。一世紀ほどの歳月を経た洋館であるが、紛れもなく、まだまだ現役の真っただ中にあるのだ。

この建物をスペイン系の修道会(聖心侍女修道会)のシスターたちが日本銀行から

ずいそう Occasional thoughts

手に入れたのは1960年代の初め。現在のキャンパスとなっている敷地全体を購入した。むろん安い買い物ではなく、多額の負債を抱えたシスターたちは国内や海外で寄付を募った。そしてコンドルの洋館の隣に新しい校舎を建て、横須賀からこちらに移転した。創立当初の国文学科、英文学科のほかに、スペイン語スペイン文学科も開設された。その後も年々、大学の規模は着実に拡大し、大学院やいくつかの研究所も整えられた。41名の新入生でスタートした本学は、この70年のあいだに2万人を超える卒業生を送り出した。そしてその70年のうちの60年は、この洋館とともに過ごしてきたのである。

1階の広間の一角に本学の創立者であるアルゼンチン出身のシスター・ラマリョの功績を讃えるプレートが貼ってある。50年ほど前にアルゼンチン大使館から寄贈されたものだ。シスター・ラマリョは、1934年に初めて来日した聖心侍女修道会の4人の修道女のひとりで、この敷地を手に入れるためにシスターたちの先頭に立って奔走した。だが歳月が流れ、多くいたシスターたちはこのキャンパスからしだいに消え、現在はひとりもいない。

草創期の修道女たちの高い志と果敢な行動力に思いを馳せながら、こうして理事長室の机の前に座っていると、やはりなんだか落ち着かない。少子化やデジタル化、それにコロナ禍が容赦なく押し寄せ、人々の意識も学びの方法も、考え方や生き方も、すべてが決定的に変わらざるを得ない、いやもう変わってしまったという予感がひしひしとするのである。ここ数年、学内でさまざまな改革に取り組んできたが、さらに大胆な変化を余儀なくされるはずだ。良きにつけ悪しきにつけ新しい時代が到来している。そうした時代において、互いに支え合いながら、確かな足取りで歩み続ける女性たちを育てるのが本学に課された使命である。このコンドルの建物もつぎの100年をめざして、変わることなくずっと味方になってくれるはずだ。